リレーコラム No.3（平成 29 年度）

公民館と福祉教育

倉吉市成徳公民館　館長　小谷次雄

社会教育の拠点である公民館の仕事は年々広範囲になっています。学校教育以外は全て社会教育の対象だといわれています。子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象に多種多様な「学び」の場を提供しているのが公民館です。公民館が有する教育機能を発揮して、地域の課題を解決する力を住民一人ひとりに育成することをめざして日々実践をしているのですが、なかなか思うようにいかないのが現状です。

最近、社会福祉に関する仕事が増えているように感じます。何事を行うのにも教育は大切です。教育を疎かにすれば国は滅びるともいわれます。福祉教育もまさにその通りだと思います。一人ひとりの意思決定や行動を促す基盤づくりが教育に課せられた大きな使命だと思います。地域の課題を的確に把握して公民館活動を企画します。しかし、そこでの「学び」がどう実践力として発揮できるかが大きなポイントなのですが難しい問題になっています。

人間は窮地に追い込まれた時にどんな行動をとるかによってその人の評価が変わってくることがあります。教育がどこまで浸透し定着しているか、教育の成果が問われているともいえます。とはいえ、公民館では、子どもたちの自然体験教室、子育て講座、人権学習講座、趣味の講座、健康づくりやスポーツ教室…など、幅広い企画をとおして地域の住民から親しまれ気軽に訪れることのできる公民館、存在感のある公民館をめざして地域の関係者とともに職員と楽しく仕事をしています。その中から、昨年鳥取県に甚大な被害を与えた鳥取中部地震で体験した事例を紹介します。

平成２８年１０月２１日（金）午後２時７分震度６弱の地震が私たちの地域を襲いました。成徳公民館２階中会議室で公民館主催の趣味の講座「つまみ細工」を開催中の時でした。地域の人２０余名が参加していました。激しい揺れに、ドアは倒れ、ガラスは割れ、屋根の瓦は雪崩のごとく落下していました。想像を絶する凄まじさでした。参加者は恐怖におののきながらも机の下に身を屈めました。まずは身の安全が第一。状況判断をしながら大声で指示をしました。地震が少し治まった頃を見計らって、つぎの行動を起こしましたが、幸いにも誰一人怪我もなく避難できて一安心しました。

成徳地区は多くの住民が甚大な被害をうけました。ブルーシートで屋根を覆った家が数多く見られ、壁が崩れたり、瓦が落ちたり被害甚大でした。「災害は忘れた頃にやってくる」と言われますが、まさにその通りでした。全国各地で災害が発生していますが、私たちの地

域は安全な日々が続いていました。「倉吉は安全で、暮らしやすい処だ。」という声がよく聞かれていました。日頃から防災意識の高揚や防災組織づくりの必要性が叫ばれていましたが、いざ災害に直面してみると、どこか他人事のように思っていたのではないかと反省させられました。成徳地区は高齢化が一段と進み、独居の人も多くなっています。地域の復興に向けていろいろな課題が出てくることが予想されます。苦難な時こそ、人と人との絆がどうであるかが問われます。こんな時こそ、成徳地区の底力、ひいては地域の教育力が問われると思いました。

成徳公民館も甚大な被害をうけました。館内は手の付け所がないほど散乱していました。職員もどこから手をつければ良いのか茫然の状態でした。当然のこととはいえ公民館が予定していた講座や事業も中止や延期することになりました。

一日も早く本来の公民館の機能が発揮できるようにと強い願いを持ちながらも、地域が甚大な被害をうけている現状を見れば、公民館の片づけや整備に地域の協力を呼びかけることは到底無理なことです。公民館の復旧に向けてどうするのか思案にくれるばかりでした。

そんな時、小学生の時から公民館の講座「自然体験活動」などに数多く参加していた中学生が「地震で大変だったでしょう。何か手伝うことがあれば言ってください。電話一本で駆けつけますから。友達にも声をかけて一緒に行きます。」と声をかけてくれました。丁度同じ頃、公民館で現地実習した鳥取看護大学の学生からも同様の申し出がありました。また、公民館の講座によく参加していた地域の人たちも数人申し出がありました。そこで、日時を決めてみんなで一緒に作業をすることにし、土曜日の午前中に公民館に集合することにしました。当日、予定通りの人たちが集まりました。手の付け所がないほど壊れた物、滅茶苦茶に散乱している物などを目の当たりにして被害の凄まじさに驚きの声があがりました。みんなで手分けしながら作業が進み、みるみるうちに館内が整備されました。

公民館の窮地を知り、駆けつけてくれた中学生たち、実習でお世話になったといって駆けつけてくれた鳥取看護大学の学生たち、普段お世話になっているからといって駆けつけてくれた地域の人たち、懸命に作業を続けている皆さんの姿のなかに「福祉の心」の育ちを感じ、ボランティアの真の姿を見たように思うとともに、公民館活動の成果の一端を目の当たりにしたように感じました。

このような人たちが、地域を支え、地域の活性化の原動力になると強く思いました。甚大な被害をうけた地震でしたが、復旧復興に向けて明るい光が見えてきました。公民館の有する教育機能が心を育てるための福祉教育推進の基盤にもなっていると感じ、私の心にいつまでも残る体験になりました。

公民館の屋根瓦や外壁などの修理は行政の対応によってほぼ復旧され、平成２９年４月から従来の公民館の姿となり公民館活動も活力を取り戻しています。